こいけものがたり

善三翁記

(十八) 進駐軍用材(下)

当時は、封鎖預金・旧円・新円制度の時代であった。新円でなければ、自由に欲しい物資が入手出来ない時代であった。私の店所の下請けをしていれば、進駐軍関係最優先の時代だったから、全額新円で現金払であった。伏木海陸運送㈱、トラック業者外、海運関係者等、異口同音に日本木材社様々であった。当時は、乗用車、トラック等も木炭車の時代であった。機帆船等も重油が無くて動いていない時代であった。

富山県に、官庁用、消防・警察関係外総合計して、全体で一ケ月にガソリン6㎘～10㎘位の割当てがあったと思ってる。その内三分の二は、日本木材社の進駐軍用と明記されて配給切符が主務官庁から来るので、官庁・警察と言ってもどうにもならなかった。当時の官庁・警察等と連絡を取り、余った分は、全部先方へ渡していた。たいへん恩に着られた事もあった。当時は全く「飛ぶ鳥も落す勢」であった。私が富山へ帰宅後は、夜の街などで高岡に住んでいる熊木次長以下、肩で風を切って、高岡市内を闊歩し、派手に振る舞っていたらしい。終戦直後は大インフレ時代だったので、それ程世論もうるさく無かった。

本船を一艘積み出すと、当時、富山電気ビル内にあった、米軍CIC駐在官メダリア大尉の所へ、サインを頂きに行かねばならなかった。同氏のサイン書を本店に送り、本店では各店所から集まるサイン書をまとめて、特別調達庁に提出する。そこで責任解除、代行料金が請求出来る次第であった。メダリア大尉の所へ本船積荷明細書を、20部位持参したと思う。相当の容積になった。米軍のどこの部隊へ配布されるのか判らなかったが、日本もアメリカもお役所仕事は大体同じ様に感じられた。

メダリア大尉付きの通訳さんは現在高岡でガソリンスタンドを経営している高岡石油㈱社長の佐伯佐七氏であった。一ケ月前に、一～二艘位の本船の船積みを行った。昭和21年夏から昭和22年夏迄、約一ケ年位続いたと思う。

日本国の賠償物資として、各旧軍需工場の機械類を取り外して、賠償物資として占領軍に供出する指令が、マッカーサー司令部から発せられた。供出された機械類を船積港に集結し、そこで梱包し、海外の各地へ、船積みする事になった。その梱包用材が必要となった。再度、進駐軍用材と同様に、各府県に割当て、日本木材社が集荷輸送代行業務を担当する事に決定した。伏木港は船積港に指定され、吉久貯木場が集結地に指定された。吉久貯木場は、進駐軍用材と梱包用材、双方の集結場となったので混乱していたが、盛んであった。梱包用材は、船積み指令が未だ無く、機械自体も未だ集結されず、用材はそのまま当分政府材として保管されることになった。

昭和22年秋頃から、どうも様子が一変した。連合軍司令部の日本占領政策が、一部変更になると言う噂が、本店辺りから伝わって来た。船積みは当分一切中止し、現状のまま、整頓して政府材として保管せよとの指示が、本店から正式に通知された。賠償物資として供出の旧各軍需工場の機械類の取り外しも中止となったらしい。

当時の伏木港の様子は、国内混乱時代で、産業どころか生活にすら困っている時代だったので、一般国内貨物の海上輸送に依る荷動きは全然無く、いわんや輸出なんて夢にも考えられない時代であった。本船扱いは、日本木材社以外は殆ど入船出船も無く、全く閑散としており、一部機帆船で近海を航行している時代であった。その機帆船も重油不足で、繋船勝ちであった。伏木港付近の商店街も、港に正比例して閑散で、港湾関係者、特に伏木海陸運送㈱橘直治社長(当時代議士)、栗田副社長(当時県議)、釣谷専務、寺島常務等最高幹部以下全社員一丸となって、日本木材社の作業は最優先の指示が社内に布令されているとのことであった。

進駐軍用材船積の作業は、僅か一ケ年有余であったが、私には、終生思い出の勉強になった。海上輸送、特に本船積関係の業務を経験する事ができた。伏木港及び高岡付近の港湾関係者や取締官庁の方々と知己を得る事も出来た。

私は、父の日頃の教訓を思い出し、周囲から騒がれれば尚更に、決して権力に溺れず、反対に低姿勢の態度は忘れ無い様に努めていたつもりだ。今日にして考えても日頃の父の教訓に従っていたので良かったと、父への感謝の気持で一杯である。当時は、父を亡くして未だ日が浅く、戦後の変革期でもあり、新しく当面する種々の問題に対して、若し、父が健在ならばどう判断したかと、常に、父が私の体のどこかに存在して居るように考えていた。

高岡の桐木街と言えば、当時、北陸随一の有名な花街であった。「妾一人位持たなければ商人として一人前で無い」と言われている地域であった。当然、私の周囲は誘惑の花盛りであった。しかし、後ろ指を指される様な行為は一切なく、今日でも後悔は一つも残っていない。「朴念仁」の渾名の通り、或は材木屋だから木の股から生まれて来た色気の無い仁と冷やかされた。清廉潔白であった。或る意味では、反って花街の人生の裏街道をまざまざと見せつけられた事により、後日のために、よい経験になったと、感謝している。

男として、一人の女性を愛する事。それは、一時的な感情として本人は満足し、優越感を味わうかも知れない。しかし、家庭・家族の円満を破壊し、子供でも出産すれば、後継者問題に永く尾を引く事疑い無しで、本人には反って、大きな苦悩の原因となる。そして、最後には、民謡おけさ節の歌詞「末は鳥の泣別れ」であった事をこの目で見て、よく知っている。